

キャラクター名 プレイヤー名

メインクラス	ウォーリア	Lv.1:		レベル	3
サポートクラス	レンジャー	Lv.1:	レンジャー	性別	女
称号クラス				年齢	14
種族	ヴァーナ			境遇	放浪者
出自 (効果)	一族			目標	好奇心

	筋力	器用	敏捷	知力	感知	精神	幸運
基本値	10	10	15	6	12	6	9
ボーナス	3	3	5	2	4	2	3
クラス修正	2	2	1	0	1	0	0
他修正							
能力値	5	5	6	2	5	2	3

HP	49
MP	35
フェイト	5

装備品		射程	命中	攻撃	回避	物防	魔防	行動	移動
右手	ショートボウ	20m	-2	6	0	0	0	-3	0
左手									
頭部	ハット					1			
胴部	クロスアーマー					3			
補助									
装身具									
能力値			5	0	6	0	2	11	10
スキル								4	5
その他									
総計(右)			3	6					
総計(左)					6	4	2	12	15
総計(両)									m
ダイス数			3 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	5			5	+ 2 d
トラップ解除	5			5	+ 2 d
危険感知	5			5	+ 3 d
エネミー識別	2			2	+ 2 d
アイテム鑑定	2			2	+ 2 d
魔術判定					+ d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
冒険者セット	
筆記用具	
ファインアロー	
チョーク	

現在重量:	8	所持金:	98	預金・借金:	
最大重量:	10				

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
オーバーパス	★	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果:	狼族、移動力+5m、行動値に+1							
バッシュ	2	4	メジャー	武器	単体	命中		
効果:	武器攻撃を行う。ダメージロールに+[SLd]							
バーサーク	2	3	マイナー	武器	自身	自動成功		
効果:	武器攻撃に+(SL×3)ダメ追加 リアクション-1D マイナーで解除宣言またはシーン終了で解除							
ホークアイ	3	3	ムーブ	武器	自身	自動成功		
効果:	射撃攻撃に+(SL×3)ダメ追加 移動またはシーン終了で解除							
アームズマスタリ:弓	1	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果:	弓装備時、命中判定に+1D							
アローシャワー	2	4	メジャー	武器	効果参照	命中		
効果:	1つのエンゲージ内のSL×2体以下の任意の敵に射撃攻撃							
スピードショット	1	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果:	弓、錬金銃、魔導銃の行動補正が0未満の時、±0にする。							
サーチリスク	1	-	パッシブ	-	自身	-	-	
効果:	危険感知判定に+1D							
アスレチック	1	-	パッシヴ	-	自身	-	-	
効果:	上り、跳躍での筋力判定+1D							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

ミリィ・ファネットはヴァーナのとある狼族の村の家に生まれる。その村は周りが深い森に囲まれており、そこに住む人々は村以外の者との関わりを避けるように過ごしていた。そのせいか、この村には『森から出るべからず』という風習さえ生まれ、森から出ることは禁忌とされていた。

ミリィはそんなある日、森で冒険者と出会う。はじめこそミリィは警戒していたが、会話の中で優しい態度を見せる冒険者にだんだんと気を許していった。その後、その冒険者から話を聞いているうちに彼女は外の世界の話を聞いた。冒険者はミリィに自らの体験談を勿体ぶる事なく話し始めた。その話はミリィが想像もできないような、わけのわからない言葉ばかりだったが、わからなかったからこそミリィは大いに興味を示した。村に閉じこもっている事が途端につまらなく感じてしまったのだった。

冒険者は話の途中で「そうだ！」と言って突然バックバックから何かを取り出した。「これ、興味ありそうだしあげよう。これは魔導銃《キャリバー》って言ってね、まあ壊れちゃってるんだけど。新しいのは渡せないけどさ、それでちょっといろいろやってみるか？」ミリィは冒険者から渡されたそれをじっと見た。どう使うかわからなかった。ただ、持った時から謎の高ぶりが胸の内に感じられた。持っているこの銃がどれほどの世界を巡ってきたのか、その銃についた汚れはその冒険の足跡を確かに刻んでいた。「…！ 適正があるのか…。もしいつか君が冒険をする時があるなら…それも持っていきといていい。もしかしらどこかで直せるかも知れないね。そのときは、うん、存分に使ってあげるといい。」このとき、ミリィは初めて森の外に出ることを意識した。そしてミリィが森を出ることを決心するのに長く時間はかからなかった。

そうして日に日にこっそりと準備をし、いよいよ村を抜け出すその夜。この日まで自分を大切に育ててくれた両親に別れの手紙を残す。寂しいとは思ったが、それ以上に外の世界を見たい気持ちが強かった。そうしてミリィは動かない魔導銃を鞆の中にしまい、錠を破り外の世界へと旅立った。

森の外へと出たミリィは村で得たサバイバル術を生かし、色々な街を旅して転々としていた。